

社会的疎外状態にある末期腎不全患者への介入経験

医療法人衆和会 長崎腎病院 大村腎クリニック

○山下万紀子 白濱美和 青柳真生 田中健 丸山祐子 前川明洋 船越哲

【はじめに】

維持透析患者のなかには、家族や社会から疎外され、身寄りのない状態で治療を余儀なくされる例が少なからず存在する。今回、自己管理能力に乏しく、結果的に多数の医療介入・福祉支援により救命された症例を報告する。

【症例】

60 歳男性。高校卒業後に故郷を離れて職を転々としていたが、35 歳で糖尿病を指摘される。自己管理能力に乏しく増悪し、この頃から家族に金銭的迷惑をかけたことで関係が疎遠となる。50 歳半ば、生活保護を申請したことで初めて公的機関が介入した。自宅を訪ねると糖尿病性神経障害のため両手・両足の自由を失い、室内を這って移動し創傷が無数あり、環境は不衛生であった。デイサービスが開始されるが糖尿病性腎症による尿毒症の出現で間もなく透析導入となった。「介護をして助けて欲しい。」と生きる希望強く、医療専門科7科、福祉的支援 11 種が開始された。5 年経過した現在、心身の状態は安定し、医療行為・福祉的な介入事項は半減でき、集団行動で笑顔を取り戻している。

【考察】

家族の支援が皆無の透析患者に対し、医療と福祉の絶妙な連携によって救命・QOL 向上に成功したと一例と思われた。

【まとめ】

社会的疎外の状態にある腎不全患者においては、医療スタッフと福祉関連スタッフの連携により、各々の専門知識をもって患者の命を支えることが望まれる。